



## 思い出の絵本

### 『たまごのあかちゃん』

かんざわとしこ文／やぎゅうげんいちろうえ(福音館書店)

神泉薫さん (神奈川県在住)

常陸太田大使

「ぴっぴっぴっぴんにはにわたりのあかちゃん  
こんにはは」。優しい語りかけのリズムが印象的な絵本  
『たまごのあかちゃん』。娘が二歳を少し過ぎたころ、  
眠る前に読み聞かせをしていた懐かしい一冊だ。白い  
まあるい様々な大きさのたまごの中から生き生きと  
誕生するあかちゃんたち。にわとり、かめ、へび、ぺん  
ぎん……。少し前まで、母胎というたまごの中に  
いた娘も、小さな友だちに出会うように、絵とことば  
を楽しんでいた。

最近のこと、久しぶりにこの絵本を娘に見せると、  
内容は忘れてしまったけれど、読んでもらったことは  
覚えているという。そこで、ページをめくって読んでみた。  
「たまごのなかでかくれんぼしてるあかちゃんは  
だあれ？でおいでよ」。すると「ああ、今、ママの  
声で思い出した！」と笑顔がこぼれた。娘の中で声の  
記憶が鮮やかに蘇り、私自身もオレンジ色の灯りの下、  
膝に娘を抱えて絵本を開いた夜の光景が、ふわっと  
まぶたに浮かび上がってきた。柔らかな髪の毛の匂い、  
ほっぺの感触、小さな愛らしい指先。二人でそっと  
絵本を旅し、最後のページをパタンと閉じると、娘の  
瞳もいつのまにかパタンと閉じて――。陽だまりの  
ように温かい記憶の宝物だ。



フォonzもおかげさまで95号を迎えることができました。いつもは連載でまとめられているコラムにスポットをあて、今回は市民の皆様にもリレー形式で投稿していただいている「思い出の絵本」を特集に！  
様々な方々の思い出の絵本をご紹介します。読書の秋におすすめです。

『おじいちゃんが  
おばけになったわけ』

元フォonz・ネットワーク  
関根悦美さん(町屋町)



キム・フォップス・オーカソン 文  
エヴァ・エリクソン 絵  
菱木 晃子 訳 (あすなろ書房)



その人との出会いは、まるで奇跡のようだった。  
「東日本大震災の被災地に手編みのマフラーを届けよう」という活動を投稿したツイッターに、見知らぬアカウントからコメントが届いた。

言葉から感じる優しさのせいかな、やり取りを繰り返して、当時働いていたカフェで会う約束をした。想像していた通り、その人ほととも素敵な女性だった。

お互い、読み聞かせをしていたり、猫や映画が好きだったり、会話の一つひとつが楽しかった。

『おへそのあな』

読み聞かせ屋サチエ  
小林 佐千江さん



長谷川義史 (BL出版)

命の誕生を楽しく描いた絵本です。赤ちゃんの誕生を心待ちにしている家族の様子を、お母さんのおへそのあなから赤ちゃんが見えています。家族だけではなくありません。風も波も花も月も、この世界の全てが命の誕生を心待ちにしているようです。その期待に呼ばれて生まれてくる赤ちゃん。世界には、どんな素敵なことが待っているのでしょうか？最後のセリフから裏表紙へ続く物語も絵本らしく、ゆったりと静かに心をあたためてくれます。

『そらいろのたね』

金砂郷小学校  
富永 佐江子 校長先生



なかがわりえこ 文 / おおむら ゆりこ 絵  
(福音館書店)



主人公のゆうじが飛行機で遊んでいると、きつねが来て欲しがります。僕の宝物だから、あげないよと断ると、きつねが僕の宝物と取り替えてとお願いします。それが、「そらいろのたね」です。「そらいろのたね」とは、一体どんな種なのでしょう。

水色ではなく「そらいろ」というところがいいなあと思います。茶色の種はありますが、そんな不思議な色の種は、見たことがありません。ページをめくって、イラストに注目すると、おなじみの動物が隠れていると、



そんな彼女から、日立市で毎年開催される絵本音楽会に初出演すると聞き、会場に向かった。その時に彼女のグループが読んだのが、この絵本だった。

エリックの大好きなじいじが、突然心臓発作で亡くなってしまいました。お葬式が終わった夜、おばけになったじいじがエリックのところへ少し困った様子でやって来ました。

おばけの本に「この世に忘れ物があると、人はおばけになる」と書いてあったと言います。いつまでもおばけのままではいられないと、二人は家の中や町の中を、忘れ物を探して歩きました。あんなこと、こんなこともあったね。たくさんの出来事を思い出しましたが、じいじはおばけのまま。

何日か過ぎて、その夜のじいじは、ニコニコしながらエリックの部屋のタンスに座っていました。じいじが忘れていた大切なこと。

それは…  
一番大事な孫のエリックに、「さよなら」を言うことでした。

お互いに、ずっと忘れないよと約束して、じいじはやがて、やみの中に静かに消えていきました。

その後、つくば市に引っ越した彼女とは、前のようにお話もできなくなったが、この絵本は、彼女との思い出と共に、私の大切な一冊となっている。

私は幼児から大人・お年寄りに向けて、茨城県内外で読み聞かせの活動をしています。今回、思い出の絵本として「おへそのあな」を選書した理由は、これまで最も多くの場で多くの人と時間を共有してきた絵本だという点で、思い出の絵本としました。子ども達は絵本の中の赤ちゃんと自分や兄弟とを重ねて嬉しそうに笑います。子どもがいる人は我が子と重ねて、孫がいる人は孫に重ねて。そうでない人は自分自身と重ねて微笑み、時には涙を滲ませる姿を目にしてきました。どの世代の人にも、どの環境で生きる人にも、それぞれの心に寄り添ってくれる絵本です。

悲しみや苦しみに押しつぶされそうなおことが起こっても、あなたもあなたの大切な人も、幸せになる為に世界に迎えられる生まれてきた唯一の存在であることを、絵本「おへそのあな」から感じただけだったら嬉しく思います。



読み聞かせ屋サチエさん  
プロフィール

2011年、茨城県内外で活動を開始。幼児から大人・お年寄りに向けて、年齢や環境に寄り添った絵本を、ご希望のテーマで読み聞かせさせていただきます。絵本を閉じた後も日常の中で物語が続いていくような、心に伝わる読み聞かせをしていきたいと思っています。

宝探しをするような楽しさもありま  
す。子どもの夢や想像力を育んでく  
れる絵本です。

この作品は、初版が一九六七年で、日本ばかりでなく海外でも高く評価され、諸外国でも出版されています。児童文学作家である姉の中川李枝子さんが物語を書き、妹の大村百合子さんが挿絵を描いています。お二人の作品である「ぐりとぐら」シリーズも、私は大好きです。

三人の我が子ばかりでなく、担任した子ども達にも教室で読み聞かせをし、絵本は手垢で真っ黒になりました。先日、孫も生まれました。孫が大きくなったら、是非読んであげたいと思っています。また、こんな素敵なお話や挿絵を描いて、いつか絵本を作るのが私の夢です。

今日は、1年生に  
読み聞かせを  
しています。



児童は本が  
大好きです。



## 『お父さんはウルトラマン』

読み聞かせサークル 金砂郷おむすびの会

生天目 久美子さん（下利員町）

私がこの本に出会ったのは、二十数年前地域の読み聞かせサークルの会員になって間もなくの頃です。小学校の高学年にはどんな絵本がよいのか迷っていた時、本屋さんで見つけました。楽しさの中に大切なことが描かれていて、心が躍りました。そこで私と同じ読み聞かせをこれから始めようとしていたもう一人のメンバーを誘い、二人でドキドキしながら六年生に読み聞かせしたことを、今でも鮮明に覚えております。



みやにしたつや 作絵（学研）

怪獣と戦い傷だらけでフラフラになっても、家に帰れば子どものために戦いごっここの相手をするウルトラマンお父さん。悪い怪獣にはとことん厳しく、弱い怪獣は助けてあげるかっこいいお父さん。どんなに仕事が忙しくても

## 『二平方メートルの世界で』

常陸太田市立図書館 司書

川崎 訓子さん



前田 海音 文 / はた こうしろう 絵  
(小学館)

この本を手にした時から私にとって、忘れられない一冊となりました。自分の好きな絵本作家さんが書いたということもありますが、なによりもタイトルと表紙に惹きつけられてしまいました。

「二平方メートルの世界で」とはどんな世界だと思えますか？表紙に描かれている女の子は枕を手にベッドの上に立ち、果敢に困難に立ち向かっている表情をしています。この二平方メートルという空間は、病室のベッドから見た世界のことです。カーテンに囲まれたベッドで過ごす女の子は前田海音さん。彼女は脳神経の病気を患い、辛い治療を受けながら入退院を繰り返しています。病気になったことで感じる孤独や不安と闘いながらも家族を気遣い、「わたしだけじゃない」と自分に言い聞かせ言葉を



## 『スイミー』

ゆめいろ保育園 保育士

笹島 英里香さん



レオ・レオニ 作 / 谷川 俊太郎 訳  
(好学社)

小学校の教科書に取り入れられている「スイミー」が私の心に残っている絵本です。私は幼い頃、身体が弱く高熱を出し、繰り返し保育園を休むことが多い子でした。そのため、友達の輪に入ることができず、ひとりで絵を描いて遊んでいる、少し寂しい幼少期を過ごし小学校へ入学しました。入学してもその状況は変わらず、自分から声をかけられないことが続いていた時、「スイミー」の本に出会いました。

兄妹を失ったスイミーは、海の中の生き物に出会い、徐々に元気を取り戻していく。そして新しい小さなさかなの兄妹を見つけ、一緒に遊ぼうと声をかけるが、大きなさかなが怖くて外に出られないことを知ったスイミーは、





小学校での読み聞かせ



子どもの誕生日だけは急いで家に帰っていく必死な姿に「ウルトラマン父さんがんばってー！強くて心優しいお父さんの背中をみて坊やは大きくなるからねー！」と思わず応援したくなります。

一番印象的だったのは、縁日に子どもが出店のお面をねだったので買ってあげようとした時、奥さんに「だめです！あなたがあまやかすからこの子がわがままになるんです！」と叱られる場面です。強いウルトラマンが奥さんに叱られしよんぼりするので子ども達が大笑いしてくれました。読み聞かせの初心者でも、子ども達が楽しんでくれたことに二人で感動し喜び合いました。この本は、読み聞かせ活動の背中を押してくれた忘れられない思い出の一冊となりました。



常陸太田市立図書館  
図書館まつり

リレー連載中。  
今回は、柴田美智子さんです。



ジーン・ウィリス 文 / ラケル カタリナ 絵  
前田 まゆみ 訳 / 寛 裕介 監修  
(小学館)



### 『わすれないでね ずっとだいすき』

吉村 昌子 さん (天神林町)

ふと身近な家族や自分が認知症になったらと不安に思ったとき、この絵本に出逢いました。五歳になる孫のジョージと認知症

になったおばあちゃんとの日常が、温かな言葉と優しい色彩で描かれています。

おばあちゃんは、毎日逢いに来るジョージのことが大好きなのに、名前を忘れてたり、できなくなるが増え、不安になっていきます。以前とは違っていくおば

飲み込み我慢する姿は健気で、読んでいる私のほうが切ない気持ちにさせられます。しかし、先の見えない入院生活の中で海音さんの支えになつたのが、テーブルの裏に残されたたくさんのメッセージでした。そこに書かれた子どもたちの言葉が彼女に勇気を与え、今までの思い出を作文にしたことでこの絵本ができました。海音さんが絵本の言葉に込めた思いが闘病している子どもたちの励みになり、生きていく力になることを願っています。

私はこの絵本に出会えたことで海音さんのことを知り、言葉に励まされました。彼女の伝えたい言葉が絵本を通して、一人でも多くの人に届きますように。

小さなさかなのことを考えて考えて……。大きな魚になって一緒に海を泳ぐことができた。外の新しい環境を伝えたい知らせたい思いで、声をかけ仲間を作ったスィミー。自分から声をかけていくことでお互いを知ることができ、友達関係が深まっていくことを、スィミーの姿を見て学ぶことができました。

私の友達づくりの原点、それは「スィミー」です。今現在に至るまで、笑顔で自分から積極的にお話をするように心がけ、新しい友達（仲間）づくりをしています。

あちゃん。でも気にしません。ぼくのことが大好きで、世界一、素敵な男の子と言ってくれる、一緒に踊ると笑顔になってくれる、ジョージにとつていつものおばあちゃんなのです。

五歳の孫の言葉はまっすぐで、温かくて、心に沁みます。認知症になつても、「大好き」という感情は失われず心深くに残ると思う気持ちが楽になつたのを覚えています。「私、ジョージが大好きなこと、忘れませんよ」おばあちゃんの声が聞こえてきます。

絵本は、子どもたちのものと思いがち。でも、大人の私たちにもたくさんのお話を与えてくれる、そう思える一冊です。



# 『ON.(オンドット) CAKE SHOP』

「取材」 阿部 深雪

市街地より国道三四九号線を里美方面へ向かい車を走らせ里美大橋を過ぎると、右側に気になる素敵なお店が現れます。

ここは二〇二二年十月にオープンしたケーキ屋さん「ON.CAKE SHOP」。

地元出身の店主、田所寛子さんは高校卒業後、県外で製菓を学び他店で経験を積んだのち、地元の良さに改めて気づきこの地でご自身のお店をオープンすることにしたそうです。お店の名前には、「甘いものを食べて、気持ちを切り替えて欲しい」という思いが込められています。取材に

訪れた日も次々とお客さまが来店しては、田所さんとおしゃべりを楽しみつつ嬉しそうにケーキを買って行かれました。

お店からは里美大橋が見え、四季折々の景色を楽しみながらテラス席でケーキやコーヒーなどもいただくことが出来ます。風にはためく「ON.」の幟を目印に、気持ちのスイッチを入れに出掛けてみてはいかがでしょうか。



住所／上 深萩町900  
電話／070-1182-1022  
営業時間／11:00-16:00  
(売り切れ次第終了)  
営業日／木・金・土曜日  
(不定休あり)



# 『カラスウリ』 佐々木泰弘

カラスウリは秋になると、大きな赤い実が目立つ野山に見られるツル植物です。

市内でも普通に見ることができるので、見覚えのある方も多いと思います。しかし、花をじっくりと見たことがある人は少ないのではないのでしょうか。花も大きく、白い五枚の花びらの先が複雑なレース状になっています。本当に見とれてしまうような花です。このようなきれいな花なのですが、夜にしか咲かないのです。昼間は花を閉じています。

ですから、気づく人は少ないのです。なぜ夜にしか咲かないかという点、受粉のために呼んでいる虫を蛾、特にスズメガに特定しているからだと言われています。訪れる虫を特定すればカラスウリどうしが花粉をやりとりするのに都合が良いのです。これも自然の知恵の一つです。



2023年7月19日 市内瑞龍町にて撮影

## 常陸太田の地名話

35

万畑 まんばた

『常陸太田市赤土町万畑』

川松 博

西金砂そばの郷「そば工房」から浅川沿いに西金砂神社に至る道路を北上すると三叉路となる。この手前を左上方に進むと樹林内に「万畑の千年カシ」がある。樹種はウラジロガシで、目通り幹囲七・五メートル、推定樹齢八〇〇年といういかにも古そうな巨木である。八〇〇年…という鎌倉時代…。この長い間をひっそりと過ごしてきたウラジロガシの木。今では子枝、孫枝を繁らせているという。

万畑は地名で、治承四年(一一八〇年)十一月、源頼朝が佐竹秀義を西金砂山城に攻めたとき、この山の頂上に一万本の旗(萬旗)を立てて、陣を張ったことから地名を万旗↓万畑と呼ぶようになったと伝えられている。

この「万畑の千年カシ」は、頼朝時代の金砂合戦を見てきたか…何とも興味深い巨木である。



万畑の千年カシ

<参考文献>  
『金砂郷村史』  
『環境省巨樹データベース』  
『万畑の千年カシ説明板』赤土町会作製



二〇〇〇年六月二十六日に創刊号を発行したフォonzは、二〇二五年に一〇〇号を迎えます。今まで本当に多くの皆様にお世話になってきました。今号から、今までお世話になってきた方たちにフォonzにまつわる思い出をうかがいます。第一回はフォonz創刊時の担当者・武藤範幸さんにお話をうかがいました。

「取材」 塩原慶子、萩谷浩司

二〇〇〇年に常陸太田市生涯学習センターがオープン、フォonzはその一年後の創刊だったでしょうか。武藤さんは生涯学習センター立ち上げの職員さんのおひとりでした。

「センターの事業を進める一方で、市民がつくる情報誌」のアイデアはどこから生まれたのでしょうか？

生涯学習という分野は初めての仕事で、実際に仕事をしていくと、青少年教育・社会教育から文化まで、担当する分野はとても広いものでした。子どもたち等も含め、様々な情報が集まってくるんです。

せっかくこのような情報が集まってくるのだから、市民の幸せづくりの



武藤 範幸 さん

現常陸太田市観光物産協会事務局長  
・元常陸太田市総務部長

ために働いている職員の一人として、この情報はやはりきちんと市民に還元しないとならないと思っていました。

当時は今のようにな SNS など全くなかったのですが、市民の方に取材していただいて基礎情報として発信できるものを作りたいと思い、企画書を作成し当時の館長に提案したところ、「今までにない形だね、やろう！」となったのが始まりでした。

「市民が取材をして、まとめ、さらに発信するというのは珍しかったと思います。市民に託すのは冒険ではなかったのでしょうか？」

市の職員がまとめるのとは、視点が違うと思ったんです。広報紙は市の情報載せるのが基本。市民が取材すること、読み手である市民と同じ視線・視点からの情報なので、すくっとその情報が届くと思ったんです。行政用語とかを気にせず、にね(笑)。

この担当になる前、「茨城県ふるさと塾」という勉強会で学ばせていた

だいていました。その勉強会の仲間でも市職員だった人が、「広報の力を出していきたい、どうやると市民の方に伝わるのか」という課題を見つけていて、なるほどと思いました。伝えるには同じ視点を持った市民の方にやっていただければ、おのずと面白い、市の広報とは違った視点のものができると思っていました。

「実際にフォonzに携わるメンバーはどのように探したのでしょうか？」

以前「桃源」の立ち上げにもかかわったことがあり、その時に事業者・業者など多くのかたと知り合いになることができていたのだと思います。観光課で仕事をしたときにも、「現場を大切に・市民と話せ」と教えられ、様々な方と交流・親交を結ぶことができてきたのが大きかったです。

「フォonzのネーミングを考えたのも？」

情報が泉のように湧き出すという意味で英語を調べたら「spring」、英語じゃ面白くないなああと辞書など調べたら、たまたまラテン語で「fons」を見つけて…。一番最初に写真を撮りに行ったのが大森町の泉だったんです。この泉のことは、全然わからなくて…。こんなところがあるんだと驚きました。大沢の滝や

不老沢など、フォonzのおかげで自身も地域の情報を知ることができました。



大森町鹿島神社不動尊の泉

「フォonzの役割ってなんでしょ？」

大森町の泉の事に限らず、地域のことだけが知っている情報は、その人にとって日常なのですが、その日常は他の市民にとって貴重な情報であることを知ってもらいたい、日常のすばらしさに光をあてるという、エコミュージアムの考え方もありますが、その取材すること自体がとても楽しかった記憶があります。もつともつと常陸太田の事を知ってもらい、もつともつと常陸太田を好きになってもらいたい、それがフォonzを通しての私の願いでもあります。

# 新太田点描 30

## 大窪光謙の「封内道の記」

嘉永二年（一八四九）三月、大久保村（現・日立市）の大窪光謙は姉婿光禎と従者と三人連れ立って久慈郡大生瀬村（現・太子町）にある母の生家を訪ねる旅に出た。時に光謙十五歳。母は大生瀬村の修験常蓮院瑤環（俗称・佐藤氏）の娘で、大久保村の医師大窪光茂に嫁いでいた。

光謙の父光茂は大久保村で医業を営む傍ら、天保十年（一八三九）には私有地を水戸藩に提供して在地・在郷の人たちのための教育・研修施設である興芸館（後の暇修館、改め大久保郷校）の設立に貢献し初代の館守となっている。

光茂の子光謙は幼少の時から父親のもとで学問に励み、特に和文・和歌に親しみを持っていたようである。が、万延元年（一八六〇）二十六歳の若さで死去している。

さて今回紹介する「封内道の記」は光謙が母の生家を訪れた時の道中日記であるが自筆本は現在のところ確認されていない。このため過去に解読し冒頭をコピーしておいた河原子村の修験宮田篤親の筆写本を使用することにした。ただ現在はこの筆写本も所在不明であると言ふ。以下、太田地方に関する部分を掻い摘んで記述してみよう。

三月二十二日、早朝自宅出立、天気良し。真弓の新しく開拓された道を通り亀作、幡村を越え

る。長幡部の御社は道を急ぐので参拝しないで遠くに見て通り過ぎた。夕刻に太田馬場八幡宮の宮司西氏宅に泊まる。この家は伯母の嫁ぎ先である。

二十三日、天気良し。早朝に急ぎ出立して増井、大門村を過ぎて天下野村に至る。ここで昼食を摂りながら休憩する。此処では子供供が集まって桜の枝花を手にして犬を追い駆け遊んでいた。また馬方の男もそれぞれに桜の花枝を携えていて何となく風情ある様に、

遠近にいぬ追ふわらは賤之男の  
手ごとに折かあたら桜を

それよりはるかに金砂の山を見た。ここはむかし佐竹義舜の家臣山入義藤が謀反を起こした時この山に籠城したという。この時、私の先祖大窪伊賀守光重も義舜に追隨して逆臣義藤と戦い、文明九年（一四七七）一月二十一日に息子孫三郎とともに親子揃って討死にしたとのこと、二人の故郷への想いを偲びやられてそぞろ涙ぐんでしまった。

もののふの弓箭取身の常とさえ  
知れど哀れにおもほゆる哉

やや行くと高倉村に着いた。この辺は左右の山がとて高く云い尽くし様がなかった。日も暮れかかるなかを小生瀬村に出て道に迷いながらもやつと大生瀬村の佐藤家に着くことが出来た。この夜はゆっくり寛きながら床に就いた。（以下、中略）二十四日、一日中雨降り。終日、佐藤家でよもやま話などして過ごし泊まる。

二十五日、雨の中を、袋田の滝を見ようと笠をかぶり出立する。（以下中略、和歌三首のみを紹介）

滝の音に聞きしにまさる袋田の  
白布流す景色をぞ見る

春雨に茂る楓をふりすてて

錦するとふ比をちぎらむ  
契りおきて秋ぞ詠めむ袋田の

滝に楓の紅葉するころ

それより月居時から小里越えをするために猪ノ鼻を越え、小中、大中村を過ぎ夜に平山村に至る。この玉簾の滝は、袋田の滝と比べると小さな滝ながら詠めば一入妙なりと聞かされたが闇夜なので滝の音だけ聞いて通り過ごした。

かねて聞まが玉だれの滝つべは  
玉もゆららの音のするかも

町屋の橋を渡り里の宮村の赤須氏の家に泊まる。

二十六日、佐都神社に参拝してから里川を渡り田渡、高貫などの村を過ぎ真弓の新路を越えて大久保村の自宅に戻る。

以上、全文を通読して思うのは、数え年十五歳の少年の風流心を持った感受性の豊かさであり、それに驚嘆するのは私だけだろうか。（吉成英文）（\*再度提言する。この項、本市学芸員も執筆に参加すればもっと充実した内容のものを読者に提供できるのではないだろうか。）

